

BOOKS

KOBE 外国人支援ネットワーク(編)
在日マイノリティスタディーズ I, II

『在日外国人の医療事情』『日系南米人の子どもの母語教育』

《評者》松本悦子

立教大学大学院社会学研究科

在日外国人に関わるすべての人に

街や駅を歩いていて目的地が見つからず標識に目をやると、日本語以外の表記が増えてきたことに気付く。英語、ハングル、中国語…。これは旅行者への配慮が主たる目的かもしれないが、2002年末外国人登録者数は約185万人であり、日本で生活する「在日外国人」と呼ばれる人びとは確実に増加している。

しかし、彼／彼女らが生活者として、主体的に日々の生活を営むのはまだまだ容易とはいえない。言語、住宅、子どもの教育、医療保険などに関わる問題……。

今回紹介する『在日マイノリティスタディーズ』をまとめたKOBE外国人支援ネットワークは、兵庫県神戸市長田区を中心に活動する市民団体の集まりである。同じ住民としての「在日外国人」が、自立した生活を営めることを目的としながら、上記のような問題にネットワークを生かしながら取り組んでいる。

本シリーズのⅡ『在日外国人の医療事情』はそのような幅広い活動のなかから生まれた問題意識が形にな



●シリーズのⅡ, A5判 112 ページ
定価：本体 1,000 円＋税5%
神戸定住外国人支援センター (Tel.078-612-2402)

ったものであり、大学教授、ブラジル人医師、診療所医師などが具体的な事例を用いながら問題を提示している。章のひとつ、「保健医療における通訳の役割—愛知県小牧市の事例」は、保健センターに働く人には身近に感じられる内容であろう。

「在日外国人」への対応に関する研究は最近見られるようになってきたが、多くの現場においてはまだまだ現実味に乏しいことかもしれない。しかし、健康で安心した日常生活を送るための医療や保健は、さまざまな問題のなかでも、国籍、経済能力にかかわらず保障されるべきものである。

本シリーズのⅠ『日系南米人の子どもの母語教育』は、「在日外国人」の家庭が抱える具体的な問題を通じて、母語教育の必要性をまとめたものである。さまざまな文化的背景を持つ子どもの教育を支援する市民団体の代表者や、ブラジル人コミュニティの代表者など現場の声がつつられており、多文化社会の問題がとても身近に感じられる。併せて一読いただくと日本社会において可視化されにくい「在日外国人」の日常生活が浮き彫りになるであろう。

同ネットワークの一団体、神戸定住外国人支援センター代表である金宣吉氏は、発刊にあたって以下のような言葉を寄せている。「医療に関して考えることは、何も外国人だからといって差別することも甘やかすこともない、あたりまえの人として生きていける医療とは何かを考える知恵を集めることかと思う」

最近、自分の周りに「在日外国人」が増えたなと感じている保健師さんに、是非手に取っていただきたいシリーズである。